

与信管理編 2 : 「評点が同じ 2 社の会社」どう見比べる？

《審査マンの悩み》

販売先の中で、取引額が大きい相手に対して信用度を調べるようになった。ところが、TDB の調査報告書を取り寄せてみたところ、評点が 50 点の大口販売先が 2 社あった。どう判断したらよい？
 評点が同じ点といっても、企業それぞれの強み弱みは異なります。資金繰り状況が健全で、かつ今後の展開に懸念が少ない先の見極めかたをお教えします。

ステップ 1 : 信用要素の評点内訳を見比べる

【企業概要】 評価欄				活用ポイント: 「評点の内訳を見る」 同じ評点でも信用要素の内訳を見れば企業の強み弱みが見えてきます。 A社とB社を見比べると A社 老舗の大手企業といえども安心とは限らない。資金調達力・金融機関の支援状況を確認してみましょう。 B社 今後も業績が伸びて行くかもしれませんが、受注増加によって運転資金不足の不安が出てくる恐れもあります。資金調達力・最近の動向と見通しを確認してみましょう。
A社				
信用要素別評価				
業歴 (1~5)	5	企業活力 (4~19)	9	
資本構成 (0~12)	2	加 点 (+1~+5)	-	
規模 (2~19)	15	減 点 (-1~-10)	-	
損益 (1~10)	3	合 計 (100)	50	
資金現況 (0~20)	8			
経営者 (1~15)	8			

評点内訳 「業歴」「規模」は高いが、「損益」「資金現況」「企業活力」は低い。
 言い換えれば「老舗の大手企業だが、業績面は近時は赤字決算で停滞ぎみ」

B社			
信用要素別評価			
業歴 (1~5)	2	企業活力 (4~19)	13
資本構成 (0~12)	4	加 点 (+1~+5)	-
規模 (2~19)	5	減 点 (-1~-10)	-
損益 (1~10)	7	合 計 (100)	50
資金現況 (0~20)	11		
経営者 (1~15)	8		

評点内訳 「業歴」「規模」は低い、「損益」「資金現況」「企業活力」は高い。
 言い換えれば「業歴が浅く規模は小さいが、黒字決算を続ける成長企業」

ステップ 2 : 信用要素の内訳から判明した「強み」「弱み」を報告書本文の中から読み込み判断する

(1) 【資金現況欄】より現在の業況や収益状況が平常に保たれ、懸念材料が無いかを確認します。

【資金現況・不良債権欄】				
資金現況				
業況 (売上)	大幅増加	増加	横ばい	減少
収益性	良好	普通	悪いが改善可能	悪く改善困難
回収状況	良好	普通	一部遅延	遅延
支払能力	十分にあり	あり	やや苦しい	苦しい
資金需要動向	なし	前向き資金需要あり	後向き資金需要あり	
資金調達余力	十分にあり	あり	ほぼ限界	限界

【資金現況】
 調査時点で捉えた短期的な資金繰り状況を業況・収益性・回収状況・支払能力・資金需要動向・資金調達余力の 6 つの指標から評価。

活用ポイント「6 つの指標を併せ見る」

例 1. 業況「大幅増加」、支払能力「やや苦しい」、資金調達余力「ほぼ限界」
 運転資金不足による突発的な破綻リスクが。

例 2. 業況「減少」、収益性「普通」、支払能力「あり」
 受注減ながら、費用圧縮によって収益性を維持し資金面の不安を乗り切っている。

指標を単一ではなく、それぞれを併せ見て、資金繰りの全容をとらえることが大切。

(2)【現況と見通し欄】の【資金現況と調達力】でさらに資金繰り状況の詳細を確認します。

【現況と見通し】 資金現況と調達力欄

■資金現況と調達力

資金現況については、運転資金の不足分を割引で補っての繰り回しだが、割引率1.4億円に対し、ここ1年の割引実績はピーク時でも8億円程度と余裕を持っての利用であり、将来的に運転資金需要が増加した場合でも一定の対応余力は有していると判断される。
調達力については、不動産の資産背景が厚く十分な担保余力が認められるので、将来的な研究

【現況と見通し】資金現況と調達力

決済、回収、資金調達の状況や不良債権の有無を踏まえ、資金繰りの現況を記載しています。

活用ポイント:「金融機関の支援スタンス」を見る

事業再生計画や取引金融機関の支援スタンスも参考にし、今後の調達余力をおさえましょう。

(3)【銀行取引】から調達面の裏づけとして金融機関との取引状況も確認します。

【銀行取引】 借入状況/付記欄

■借入状況

〔平19年10月現在〕

借入先	(印)主力銀行	割引手形	短期借入金	長期借入金	定期預金
みずほ(銀座)			732,000	365,000	341,000
三井住友(銀座)			24,000	48,000	25,500
合計			756,000	413,000	366,500

■銀行取引等付記

借入金の使途は短期が運転資金、長期が設備投資中心である。
借入総額は増加傾向にあるが収支バランスは保っており、取引行も継続支援の意向にあるもよう。
なお割引率はみずほ(銀座)1.3億円、三井住友(銀座)1億円、借入残はこの1年ほとんど変化はない。

【借入状況】

取引金融機関の一覧が記載。

活用ポイント:「1行集中取引か分散取引か」

これといったメインバンクをつくらず、多行取引をしている企業の場合、いざ経営危機が起こった際、メインバンク主導の支援態勢が整わず、企業再生が難航するおそれがあります。

活用ポイント:「不相応に取引行が多い」、「遠方の金融機関からの借入がある」

資金調達が困難になってきた企業は、取引行を増やしたり遠方の金融機関とも取引を始める事例もあります。

(4)【現況と見通し欄】の【最近の動向と見通し】で、企業のもつ「強み弱み」や「環境面の良し悪し」を踏まえた最終的な評価を読み込み判断します。

【現況と見通し欄】 最近の動向と見通し

■最近の動向と見通し

平成20年5月期については、前期よりも自動車部品の需要が若干持ち直し、特に主力取引先の青山自動車からの受注は増加しているものの、当社の主力得意先層である中堅以下のメーカーでは、いまだ設備投資に慎重な先が大半を占めることから、9月末時点までの平均月商は3億6,000万円内外と前期に比べ減少している。
また損益面では、依然原材料である素材金属の価格上昇の幅を受け、粗利益率は2.5%で業種比前年比約2ポイント減となっているが、採算は確保されている。
原料価格の上昇や大手商社・金融機関による同業他社の系列化など業界環境も厳しい状況下であり、今期売上高は4.3億円強、経常利益は3,000万円を見込んでいる。
国内の業界上位の技術力を保有し新商品の開発を打ち出すなど前向きな動きがみられ、加えて資産背景なども充実していることから、当面は無難な運営が予想される。

【現況と見通し】最近の動向と見通し

調査員がその企業を取材結果、業界環境や取材の裏付けをもとに、企業評価を総括しています。

活用ポイント:「最近の動向をつかむ」

今期の業績目標に対して、現時点の受注状況や業績目標に対しての進捗を確認し、今後の展開を見極めましょう。

新規事業開始や大口受注等のようなポジティブ情報もあれば、拠点閉鎖や焦付発生といったネガティブ情報もあります。最新のトピックにも注目してみましょう。

評点が同じでも、企業によってその内容は異なります。大切なのは、評点の合計点ではなく、企業の強み弱みの見極めにあります。

また、同じ評点50点の企業も、「1年前の45点から50点に上がった」という**上昇傾向**もあれば、「1年前の55点から50点に下がった」という**下降傾向**をたどっていることも考えられます。

企業の評価は、時間の経過とともに変化していきます。今後の業績の進捗や変化をとらえるためにも、継続的に報告書を取得し審査することが大切です。

(なお、ここで用いた報告書サンプルについて実在する会社・個人とは一切関係ありません)